

## The Book I Recommend

—Googleスライドを利用した“Show and Tell”の試み—

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科  
八宮 孝夫

# The Book I Recommend

—Googleスライドを利用した“Show and Tell”の試み—

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科  
八宮 孝夫

## 要約

英語による「おすすめの本の紹介」は“Show and Tell”などでよく用いられる言語活動で、それ自体目新しいものではないが、従来は写真や実物で提示しながら英語で紹介していたものを、Google スライドを利用して、実践してみた。その手順ややり方、Google スライドで提示する際の注意点などを紹介する。併せて中学3年生の選ぶ本の傾向なども報告したい。

キーワード：内容の視覚化、フィードバック、話し手-スライド-聴衆の三角形の連動、生徒相互の学び

## 1 はじめに

「おすすめの本の紹介」は筆者もこれまで、さまざまな形で実施してきた言語活動である。中1であれば、過去形の導入などで“*This is Botchan. Who wrote it? Natsume Soseki wrote it. When did he write it? He wrote it in 1906.*”のような例を出し、自分の好きな本について言ってみる、という例がある。中2であれば、受け身を導入した後（“*This is Botchan. It was written by Natsume Soseki.*”）の活動が考えられる。直近の65期生では“My favorite writer”として“*This is Botchan. Do you know the man who wrote it?*”のような関係代名詞導入後の活動として行った。いずれの場合も、本の実物を提示し、作家の写真の拡大コピーなど見せながら“Show and Tell”の形で行ってきた。ただ、この数年で、本校にも各教室にプロジェクターが設置され、Google Classroomによって提出物の集約を行うようになり、GIGAスクールの導入で、各生徒がChromebookを手にするような時代になった。新しい形式の“Show and Tell”も可能なのではないかと考え、今回、Google スライドを利用した実践を試みた。

## 2 前段階：教科書の言語活動から

### 2.1 1学期のチームティーチングの活動

筆者は1学期のチーム・ティーチング(以下TT)の活動として、“The Song I Recommend”を行った。

これは教科書 *New Crown English Series 3* (以下、*Crown 3*) の Lesson 1 Stand by Me の USE: Speak のコーナーで「世界の中学生に聞いてほしい曲を紹介しよう」というものであった。Opening – Body – Closing という構成によって自分のお気に入りの曲を英語で紹介するもので、まず ALT と筆者でデモンストラレーションして見せ、スクリプトを書かせ、その曲のオンライン上の動画サイトのリンクとともに Google Classroom に提出させた。毎回7名に曲の一部を聞かせた後発表させ、6週にわたって行った。発表の前の週までにスクリプトの添削を行いフィードバックしたうえで発表させた実践である(詳しくは本論集の英語科を参照されたい)。お互いの好みの曲を知ることができる点、新たな曲を知る機会になる点などこの活動を生徒は非常に楽しんで取り組んでいた。

### 2.2 夏課題として

2学期も何かを紹介するような活動をしようと考えたところ Lesson3 The Story of Sadako の USE: Write として「おすすめの本の紹介をしよう」という言語活動があった。夏休み前にこの課を扱ったこともあり、この部分の活動を夏課題の一部とし、夏休み後に提出させることにした。

この活動は、以下のような指示が出ている

(*Crown 3*, P44) :

- Step1 内容を考える : 1)Character / Story 2)Good Points という2点から説明する  
Step2 考えを整理する :

---

“The Book I Recommend” ~A “Show and Tell” Type Task by Using Google Slides

- 1) Opening : 紹介する本
- 2) Body : 登場人物、あらすじ、おすすめのポイント
- 3) Closing : ひとこと

### Step 3 文章を書く : (具体例あり)

以上のような手順で、紹介したい本について英語で書き、2学期初めに提出するよう指示した。

なお、2学期は単なる発表ではなくて Google スライドを用いて“Show and Tell”を念頭に置いていたので、まず、生徒たちのプレゼンの習熟度を見ておく必要があった。幸い、1学期末に「東北地域校外学習」のまとめとして、各班によるプレゼン発表会が催されたので、一部拝見したところ多くの生徒は機器を十分使いこなしており、これなら2学期の実施に支障はないことが確認された。

## 3 2学期の実践

### 3.1 Google スライドによる視覚化

2学期初めにスクリプトを回収した。生徒のおすすめの本はバラエティに富んでおり、興味深い活動になることが予想されたが、教科書の活動はあくまで「書く活動」で、特にプレゼンは意図されていないのであった。そこで、最初の2回のTTで、どのようにして書いた内容を Google スライドで提示しプレゼンするかを1学期同様、筆者とALTでデモンストレーションすることにした。

1学期のプレゼンとの違いは、この Google スライドによる視覚化である。1学期の場合は音楽を流せば、おすすめの曲がどういう感じか一目(聴?)瞭然であったが、本の場合は内容の要点を示す必要があり、それを視覚化するのであるから、さらに難易度は上がる。視覚化には2種類ある。

- 1) 具体的事物の視覚化 : 紹介する本の表紙や作家の写真など、従来の“Show and Tell”でも行っていた部分。
- 2) 内容の視覚化 : いわゆる、character / story の部分で、主人公+主要登場人物の名前を示したり、イラストがあればそれを提示する。あらすじは、話の流れでキーワードとなるような語句を文字で示したり、矢印など用いて関係の視覚化が考えられる。Oral Introduction で言えば、板書計画とは、まさにこの作業に当たる。

### 3.2 プレゼンの際の留意点

単にスピーチを行うだけでも、視線を聴衆に向ける(eye contact)、棒読みでなく、要点が伝わるような話し方(delivery)など重要なスキルがあるが、スライド提示をしながらのプレゼンは、更に高度なスキルが要求される。

そこで本校では海外との学校との研究交流の際には、事前に英語プレゼン・ワークショップを行っている。この講座を10年以上担当していただいているVierheller 夫妻によれば、以下のような点に留意すべきだという(『駒場論集』第52集より) :

#### ①First tell, second show

まず、口頭で述べてから絵やグラフを提示すべし。始めに情報を提示してしまうと、相手は注目しなくなる。

#### ②Repeat important things

大切なことは繰り返すべし。

#### ③Show your message in large prints

提示する文字は最小限に。また大きな文字で提示すべし。

#### ④Get the audience involved

質問をしたり、ポイントを繰り返させたりして聴衆を巻き込むべし。

#### ⑤50% read, 50% look up

視線を上げるべし。

#### ⑥Gestures change voice

ジェスチャーは声のトーンをコントロールするのに役立つと心得るべし。

#### ⑦Backward chaining

練習は結論部から、序論の方に戻るようすべし。

#### ⑧Nervous crushing: Stop-Breathe-Think- Act

緊張したら、まず立ち止まり、深呼吸し、よく考え、行動すべし。

筆者はプレゼンの専門家ではないが、上述のワークショップにずっと関わり続けており、これらの教を念頭に置きながら、生徒へのデモンストレーションを行った。

### 3.3 具体的なデモンストレーション

9月の最初のTT授業で、筆者が2回目のTTでALTデモンストレーションを行った。筆者の例を以下にあげる :

Mr Hachimiya's presentation script

[Opening]

Look! This is the book I recommend: Emil and the

Detectives (写真1:表紙の絵)

It was written by Erich Kästner, a German writer, in 1929. (写真2:作家の写真

+Erich Kästner,をアニメーション)

[Body]

(Characters / Story)

Main character is Emil, as the title says.

(写真3:表紙の絵・別バージョン→エミールと友人のイラスト入り)

The story goes like this [The outline (synopsis) of the story is:

His mother asks Emil to visit his grandmother in Berlin by train and give her some money and flowers. This is the first time for him to travel alone.

But on his way, he had his money stolen by a thief! He tries to follow the thief in a big city of Berlin. But how could he keep following him without any money? And who are these detectives?

(スライドでは以下を提示)

- Travel to Berlin
- To meet his grandmother
- His money was stolen
- Follow the thief
- Without any money
- How?

(Good points)

I'm sure you'll be excited to read this book – you'll come to feel as if you were following the thief by yourself – it's quite an adventure.

(Episode related to the story) (読んだきっかけ・うんちくなど)

I read this book during the summer vacation. I read it in original – which means in German. As I gave you an English book to read, I gave myself a task – a German book to read. At first it was hard, but gradually I got into the story and finally I made it – it took me two weeks to read it.

[Closing]

You can find a Japanese version in the library, so I recommend reading it. Thank you for listening.

以上のデモンストレーションをし、ALTに内容理解の質問を幾つかしてもらって生徒の理解を確認し、その後、使用したイラストの意図など説明した(写真3

は本の表紙の別バージョンだが、主要な登場人物3人が載っている)。とくにあらすじについてはキーワード・フレーズを提示することを強調した(筆者の例はスライドで示した部分)。当時、筆者はGoogleスライドに習熟しておらず、1項目ずつアニメーションで提示することが出来なかったのだが、生徒には、アニメーションで順次提示することが望ましい、と付け加えた。

基本的に教科書のステップを踏まえたのであるが、「(Episode related to the story) (読んだきっかけ・うんちくなど)」という項目を加えてみた。本校の生徒は雑学が豊富なので、この項目を加えるとより内容にバリエーションが出るのではないかと思ったからである。また、こうすれば、仮に同じ本を紹介する場合でも、内容が全部かぶることは避けることができる。

### 3.4 プレゼン日程および原稿フィードバック

1学期と同様、毎回1列(7名)で6回実施を予定していたが、キング牧師のスピーチ暗誦で2回必要となったため、5回しか出来ないことになった。毎回8名発表x5回で終わることが出来るかとも考えたが、実際には6,7名が限度で無理であった。そこで期末考査後にも1日設定し、何とか終了することが出来た。以下のとおり:

9/07, 9/14 教師のデモンストレーションと説明

9/21 キング牧師スピーチ練習

9/28, 10/05 キング牧師スピーチ暗誦発表

10/19, 10/26, 11/09, 11/16, 11/30, 12/14

→The Book I Recommend プレゼン発表

この発表ペースについての生徒の反応であるがアンケート中「ちょうどよい」88.5%、「ちょっと多い」9%「ちょっと少ない」1.5%であったので、妥当であったといえる。

発表の順番になる1週間前までには、発表スクリプトの文法的な面や表現上わかりにくい部分の添削を行い、Google classroomの投稿欄などでやり取りをした。また、Googleスライドもアップしてもらい、やはり、わかりにくいところを指摘し再考させた。スライド作成は結構な時間がかかり、発表直前の土曜日から月曜までは7名x3クラス分、つまり20名以上の生徒にフィードバックを行ったが、かなり大変なことであった。

また、フィードバックは基本的に英語でコメントした。英語表現の指摘なので、日本語に文字変換しながら行うより、英語で通してしまうほうが早く、また簡潔な表現が出来る。例えば以下のようなやり取りであ

る：

(八宮)○○kun,

You mentioned “Haga Shoichi” by whose comics this book was made popular. You should put a little bit of his information. You also mentioned “bullying and poverty”. I think these words are key words too. Think about these things. Good luck!

(生徒)

I added about Haga Shoichi and I’m going to make a slide about him, so I would like to ask you to view it when I finish make it.

(八宮)

Okay, I will be delighted! I’m expecting your revised slides! Good luck!

(生徒)

I finished making slides. I made 2 slides “about Shoichi Haga” “what this book want to tell” Could you please view it? If you have points of improvement, please inform me.

この生徒のおすすめの本は「羽賀翔一」氏が漫画にしたことで有名になったということなので、「羽賀」氏についても言及してみても、とフィードバックしたところ、生徒もそれに応じた、というやり取りである。

この例からもわかるように、英語でフィードバックすると生徒も英語で返信してくる傾向があるので、口頭ではないものの、“communication in written English” が可能になるのである。

後日取ったアンケート中の「提出物へのフィードバック」についての反応は以下のとおり：

- ・役に立った：39.7%
- ・かなり役に立った：30.8%
- ・まあまあ役に立った：20.5%
- ・あまり役に立たなかった：9%

7割以上は肯定的に捉えているので、フィードバックのやり甲斐はあったといえる。

また、具体的によかったメントしては以下のとおり：

- ・文法ミスや説明不足に気づくことが出来た。
- ・自分のスライドに自信が持てるようになった。本番までに練習することを思い出させてくれた。
- ・最初に他人に見せるのが本番なのは不安だった。
- ・文章の間違いの指摘があったのが役に立った
- ・見る人にとって、発表のどういうところがわかりにくいのか、知ることが出来たから。

・フィードバックをもらえるとモチベーションが上ると同時に、自分の改善すべき点を客観的に受け止めることが出来た。

大きく分けて 2 つの効果があったと考えられる。1 つ目は、表現・内容についての改善点を示すこと。2 つ目は、事前に客観的に見てもらえることで得られる安心感・モチベーション・自信。

発表当日の朝に完成原稿が出てきた例もあったが、筆者のフィードバックなしに発表するという事は避けることが出来た。

### 3.5 実際の発表について：問題点

実際に発表が始まり、力作・熱演も多かったが、問題点も見えてきた。いくつか見てみよう。

#### 1)音声面、デリバリーの問題

紹介する本のタイトルや作家の名前はゆっくり、クリアに言う必要があるが、自分にはわかりきっていることのため、サッとあまり強調することなく言ってしまう傾向があった。また、発音が一本調子でお経のように聞こえる場合もあった。ALT のサディア先生は、そういうケースでは全く理解不能であった。

この問題への対処法としては、基本的にはやはり事前に何度も読み込み、内容を自分のものにする、ということ。自信がないと人間の声はどうしても小さくなりがちだからである。また、発表前にクラス全員で発声練習をするという方法もあったかもしれない。英語は音楽や体育の実技教科と似ているところがある。準備運動や発声練習なしに、いきなり試合したり、歌を歌うことがないように、英語ももっと準備運動が必要かもしれない。日ごろの音読練習の際にも、「発表活動で自信を持って発音するための基礎なのだ」と意識して読ませることが大切であろう。

一本調子の発音については、もう 1 度どこが一番伝えたい部分なのかを考えさせたり、体を動かすなどジェスチャーの利用が効果的かもしれない。Vierheller 夫妻の指摘にもあったように、“Gestures change voice” なのである。

#### 2)用意するスクリプトの問題

基本的に、ほとんどスクリプトに頼らないくらい練習してくることが望ましいのであるが、スクリプトを用意する場合には紙媒体で、文字を大きめにしておくのが良い。最近はどうしてもスマホ持参のケースが多いが、そもそも練習不足で、小さく範囲も限られているスマホの画面では、視線のみならず顔全体がスマホに傾いてしまい、聴衆を見る余裕

がなくなってしまう。現実的なのは、スクリプトを持って、瞬間目をやるだけで話すときには聴衆を向くということの習慣づけかもしれない。これこそ、Vierheller 夫妻の言う“50% read, 50% look up”ということであろう。また、これなら、日ごろの音読練習でも、例えば1度目は文字を見て音読、2度目は文字を瞬間見て目を上げて音読、というような練習をすればよい。

### 3) スライドへの表記の問題

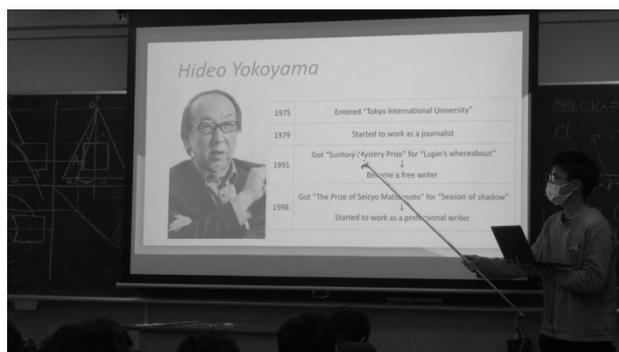
やはり、危惧されたことであるが、内容面の視覚化は難しく、あらすじを文章のまま1枚のスライドに書いてしまう例が、一時期は多かった。このスタイルがパタン化してはまずいと思い、要約文の中のキーフレーズだけを書くこと。複数あがる場合にはアニメーションで1つずつ提示すること、を強調した。これは、Vierheller 夫妻の“Show your message in large prints”に該当する。生徒はデザインに凝るのであるが、ともするとそれが見易さの点でどうか、という視点に欠けるのである。

### 4) スライド提示と聴衆への視線の連動の問題

職業柄、教師は板書しながら、顔は生徒のほうを向けて話すということに慣れているが、生徒にとっては、ことに英語でのプレゼンになると、この連動がかなり難しい。

スライドの説明に熱心になると、顔がスライドに向きっぱなしになり、声が聴衆のほうに行かなくなる。また、逆に聴衆のほうに顔を向けて説明すると、説明とスライドに登場するイラストや文字とのタイミングを全く考えずに、言葉だけが先行してしまう、ということになる。話し手とスライドと聴衆の三角形がうまく連動することが必要で、やはりこれは再三指摘しながら慣れてもらわなければならない。Vierheller 夫妻の留意点では、“First tell, second show” “Get the audience involved”に相当する。

以上、実際に発表が始まって気づいた問題点を挙げてきたが、やはりこれらのことが気になったのは、Vierheller 夫妻の留意点がどこか無意識のうちに自分の頭の中に刷り込まれていたからだと思われる。そして、毎回発表者に対しては良かった点を一言言うようには心がけていたが、「ここをこうすればもっと良い」という形で、問題点を指摘するようにした。回が進むに従って、他の発表者から学ぶことも増え、プレゼンの仕方も改善して行ったように思われる。



プレゼンの様子

## 3.6 プレゼン発表スクリプトの具体例

前項では、発表における問題点を見てきたが、もちろん優れた発表もたくさんあった。まず、発表スクリプトの注目すべき例から紹介する：

生徒例 1

Hello.

I will talk about the book I recommend. The book I recommend is “The Infection in the Capital” and it was written by this man, Tetsuo Takashima.

Characters: The main character is Yuji Setozaki. He’s a doctor and an infectious disease specialist. His father is the Prime Minister of Japan.

Summary: A new type of influenza appeared in China in 20xx. Its case fatality rate was as many as 60%. Mr. Setozaki appointed Yuji to be a member of the new influenza countermeasure meeting. First, they blockaded airports not to let the virus in but the virus came into Tokyo. As you can see in this table, the new influenza of this book is a much bigger threat than COVID-19 and other infectious diseases. So Yuji proposed blockading the roads in and out of Tokyo to keep the other cities safe and they actually did that. Was he able to save Japan from the virus? Please read the book to know the result. By the way this book was written in 2010 and it is said to be a prediction book of the COVID-19 pandemic. Here’s some common points. China tried to hide the occurrence of the virus. And there’s a rumor that the virus came from a laboratory. Measures are airport

blockade, city blockade, burning dead body, and vaccines and specific medicines. Medical collapses happen in both pandemics.

He had also written a book that was said to be a prediction. He wrote “Tsunami” in 2005 about the nuclear accident because of a tsunami and in 2011 Fukushima Daiichi nuclear disaster happened. But I think he just writes books about things that may happen in the future with high probability. So he’s not a predictor. He just warns us that this situation may happen.

Conclusion: Reading this book is fun because you can compare it with the COVID-19 pandemic. I think If the real Japan’s leaders had as much leadership as the characters in this book, the situation would be better. I also think We must prepare for disasters with high probability such as the Nankai megathrust earthquake.

I hope the COVID-19 pandemic will end soon.

That’s all. Thank you for your listening!

この例では“Characters” “Summary” “Conclusion”と順を追って書かれており、非常に構成がしっかりしている。内容的にも「首都感染」というタイムリーなもので、しかもおすすめの本は現在の「コロナ感染」が起こる数年前に書かれたものである、というのも聴衆の関心を引いた点である。また結論では現政府に対する意見も述べられており興味深い。

生徒例 2

<opening>

I recommend “Honeybees and Distant Thunder”.

<about the author>

First, I will introduce about the author, Riku Onda. (顔写真) She was born in Aomori in 1964. After she retired from an insurance firm, she published her first book in 1992. She has written many books. (何個かの本の表紙) (Never Land, empire of Light, Picnic at Night) She has won a lot of awards such as Naoki literary award and Book store award (授賞式の写真) (She won these two award for this book. And she is a first novelist who won Book store award and Naoki literary award at the same time).

<outline of this book>

This story is set in the Yoshigae International Piano Competition, regarded as the gateway to success.

One of the contestants, Jin Kazama, his original piano performance influences other contestants through the competition.

<attraction 1>

This story has many unique characters. (何人かのキャラクターの写真) You can empathize with a character.

•Jin Kazama : His father is a beekeeper. So the name of this book is “Honeybees and Distant Thunder”. And suprisingly, he doesn’t have a piano in his house, despite he has a great technique of piano. So he participates in this competition to buy a piano.

•Aya Eiden : When she was children, she was regarded as genius. However, since her mother’s death, she hadn’t been able to play the piano before this competition. In this competition, she become stronger.

•Akashi Takashima : He is 28 years old and he has a wife and daughter. So for him, the competition is the last chance.

•Masaru : accurately, Masaru.C.Levi.Anatall. But I don’t know spelling. He has perfect technique of piano. So many audiences predict that he will win the competition.

Out of these characters, I like Akashi most. Because he continues to play and love the piano, even though he couldn’t win a competition.

<attraction 2>

Her expression in this book is very detailed. It is so hard to express music by writing, however, her writing makes me feel just like listening to the piano.

For instance, this is a scene of piano performance in the book. (本のページの写真) Yellow sideline indicates that there is the expression of the piano. Thus, most of the page are filled with the expression of the sounds of the piano.

<conclusion>

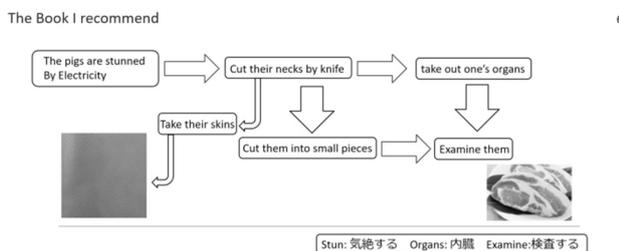
Therefore, all people can enjoy reading this book without any knowledge, so I recommend that you read this book, “Honeybees and Distant Thunder”.

こちらの例も、<opening> <about the author> のように項目に従って書かれており、構成・展開が素晴らしい。また、( ) によって、何を提示するか注も付けている。ここまで来ると、原稿を書きながら、プレゼンするイメージもちゃんと頭に浮かべていることが分かる。当然ながら、両生徒ともスクリプトだけでなく Google スライドも見事な出来でわかりやすかった。

### 3.7 プレゼン発表スライドの具体例

次に Google スライドに工夫が見られた例を見ていこう。

#### 生徒例 3



『世界屠殺紀行』という本の紹介で、タイトルの奇抜さも印象的だが、本の内容をうまく図式化してわかりやすく紹介していた。特に牛がどのような過程を経て家庭に出される「食肉」となるかの図示化が素晴らしい。また、右下には難しいと思われる単語の和訳が表示されているのも聴衆に対する配慮がある。さらに、この図からは分からないが、全体として効果的にアニメーションが使用されており、プレゼンの進行に応じてタイミングよく文字やイラストが出てくるように工夫されていた。

(全体のスライドは別紙資料に)

#### 生徒例 4

#### about the book



set in 19th century London  
the theme :  
**"double personality"**  
Dr. Jekyll (a gentleman)  
↓ use drugs  
Mr. Hyde (a ugly man)

こちらは、『ジキル博士とハイド氏』の紹介で、イラストの使用や、強調したいキーワードをボールド・イタリックでの表示など、文字上でも提示に工夫が見られた。

(全体のスライドは別紙資料に)

Google スライド・ビギナーの筆者に比べれば、生徒の方は概してスライド作成に習熟しており、事後アンケートでも、以下のものであった：

スライド作成には、以前から慣れている：53.6%

別の授業で習った：16.7%

検索して覚えた：20.5%

以上のような結果で7割以上は既習であり、2割は自力で調べたということで、ことスライドの作成に限れば、生徒はさほど負担には感じていないようである。

## 4 選択した本の傾向

この項では、プレゼンとは直接関係ないが、生徒の「おすすめの本」にはどのような傾向があるか、簡単に紹介したい。

### 1 本屋大賞ノミネート作品、その関連作家

恩田陸、伊坂幸太郎、横山秀夫、今村昌弘などの作品、とりわけ、恩田陸の『蜜蜂と遠雷』は複数の生徒に支持されていた。また伊坂作品も人気があるように感じられる。

### 2 ノンフィクション系

大崎善生、吉村昭、沢木耕太郎など。とりわけ、大崎善生の『聖の青春』は複数の生徒が扱っていた。

### 3 ミステリー系

東野圭吾、知念実希人、京極夏彦など。やはり、東野作品はどのクラスでも支持されていた。海外の作家もあり。アガサ・クリスティなど。

### 4 ライトノベル系

暁佳奈、白鳥士郎、鴨志田一、犬君雀など。以前より多い印象。筆者は一人も聞いたことなしで、これ以上のコメントは避けたい。

### 5 実用書系

*The four GAFA*, 『超時間術』、『スマホ脳』など日常生活の知恵となるような一冊を選んだ生徒もいた。

### 6 児童文学

はやみねかおるの諸作品はどのクラスでも支持された。筆者には、この作家自体、初耳。

### 7 伝統的な定評のある作家群

星新一、山崎豊子、重松清ら。海外の作家ではジュール・ヴェルヌ、R.L. スティーブンスン、もちろん、

『ハリーポッター』シリーズも各クラスで人気。

筆者にとって、7 以外はほとんど耳にしたことがなく、類別したものの、どういう傾向があるということは残念ながら分析できない。ただ、10 年近く前、65 期生が中 2 の時に “My Favorite Writer” の発表実践をした時に頻繁に紹介された三浦しおん、湊かなえ、池井戸潤らの作品はほとんど登場しなかったのが印象的であった(三浦しおん、湊かなえはそれぞれ 1 作品紹介された)。ひょっとしたら、改めて紹介する必要もないほど一般化したせいなのか、生徒の好みに変化があったのか、筆者には判断することはできない。全作品リストを別紙資料に載せるので、もしこの分野に詳しい方はご教示いただければありがたい。

## 5 今回のプレゼン課題への生徒の反応

1 学期の “The Song I Recommend” の生徒の取組みにヒントを得て、2 学期はより高度なプレゼン活動を行ったわけであるが、やはり生徒の取組み・反応は上々であった。2 学期の期末考査で “My favorite material of this term” の英作文をボーナス問題として書かせた。筆者としては授業で扱った題材を意図したものであったが、かなり多くの生徒が、”The Book I Recommend” の活動についての感想を書いていた。

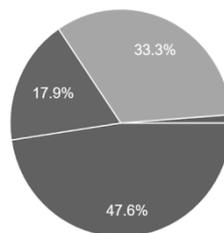
以下の通り：

・ My favorite material of this term was the book I recommend speeches. This is because I was able to hear and see diverse speeches and slides. For example, there were people with very good slides with good design and those with very easy to understand intonations.

・ My favorite material of this term is “the book I recommend.” I have two reasons. First, I can know many interesting books. I will read them in the winter vacation. Second, I can learn how to make speeches and how to make slides. I will use these techniques.

ただ、期末考査の数件の感想だけでは全体像はつかめないと思い、後日 Google form でアンケートを実施した。期末後で授業もなく、アンケートの回収は 123 名中 84 名とほぼ、2 クラス分で、これで全体像が十分つかめたかの自信はないが、ある程度の傾向は示していると思われる。以下に主だったものを提示し、考察を加える。

### 1 この活動は楽しかったですか？



- a. 楽しかった
- b. かなり楽しかった
- c. まあまあ楽しかった
- d. あまり楽しかなかった
- e. 楽しなかった

「まあまあ楽しかった」まで加えるとほぼ、ほぼ 100% であるが、本当は「かなり楽しかった」と「まあまあ楽しかった」の比率が逆であると自信をもって「楽しかった」という生徒が多かったといえるかと思う。具体的に楽しかった理由を挙げてみる：

・ クラスメートの好きな本を知ることができた。

(類似の意見 41 名)

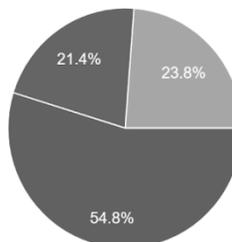
・ 自分の知らない本を紹介されて、何を讀んだらよいか分かった。(類似の意見 9 名)

・ 自らが発表側としてやった時に、その本の良さを客観視するというのをしました。本の良さを言語化するの面白かった。(類似の意見 21 名)

・ 自分の意見をスライドに起こすのが新鮮だった。

つまり、半数以上の生徒が、他のクラスメートの趣味趣向がわかる点、自分の知らない本を紹介されてためになった点を挙げている一方、自分の好きなものを言語化やスライド化して伝えることの楽しさを述べた生徒も 4 分の 1 程度いたことは興味深い。

### 2 この活動はためになりましたか？



- a. ためになった
- b. かなりためになった
- c. まあまあためになった
- d. あまりためにならなかった
- e. ためにならなかった

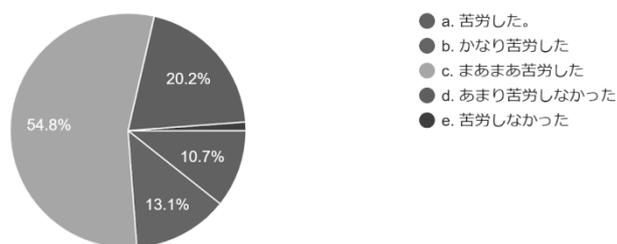
こちらは「ためになった」と「かなりためになった」で 76.2% であるから、有益な活動だったといつてよい。

具体的にどんな点でためになったかは以下のとおり (複数回答可)：

- ・人前で英語を話すのに慣れる 50名 (65.8%)
- ・プレゼンのスキルの向上 42名 (55.3%)
- ・スライドなどの作成力 39名 (51.3%)
- ・様々の分野への本の関心 26名 (34.2%)

人前で、しかもスライドなど使用しながらの“Show and Tell”はおそらく初めての体験で、しかし研究発表などでは必須とされる技術なので、中3でこの体験ができた意味は大きいのではないかと考える。

### 3 この活動の準備に苦労しましたか？

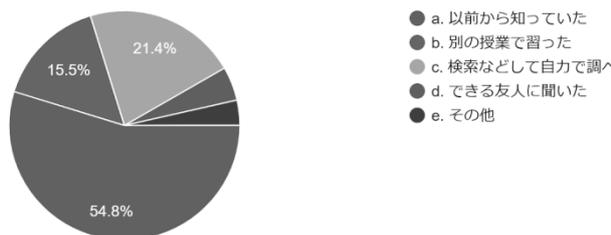


「まあまあ苦労した」が54.8%で一番多く、「苦労した」(10.7%)「まあまあ苦労した」(13.1%)の合計が、「あまり苦労しなかった」(20.2%)とさほど変わらないので、全体から見て、課題の負担感には適切といえるのではないかと思われる。やはり、自分の実力+アルファ程度のハードルがあった場合こそ、それを超える努力もし、達成感も得られるものだからである。具体的に苦労した点については以下のとおり(複数回答可)：

- ・英文スクリプトの作成 30名 (46.2%)
- ・スライドの作成 30名 (46.2%)
- ・人前での口頭発表 24名 (38.9%)
- ・紹介する本の選定 18名 (27.7%)

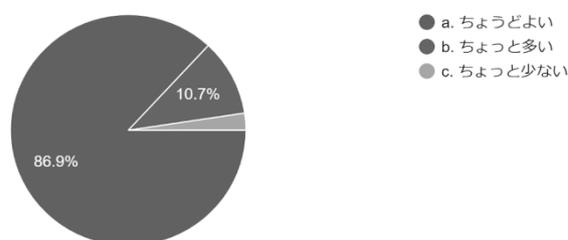
その他として、「その本について伝えたいことが多すぎて取捨選択に苦労した」という回答もあった。

### 4 スライド作成について



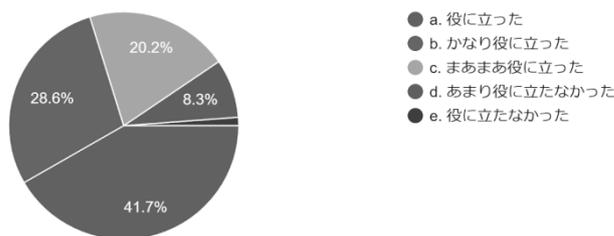
これは、3-7の項で触れたとおりで、半分以上の生徒がスライド作成は既習とのことで、それ自体の問題はなかった。「去年のオンライン授業で作る機会が多かったから自然に覚えた」という回答もあった。また、「スライド作成がうまい友人のスライド構成を真似した」という回答もあったように、発表が進むにつれて、スライド作成にも全体として進歩がみられた。これこそ、発表活動の最大の効用かもしれない。つまり、“Learn and let learn”ということである。

### 5 発表のペースについて



3.4で示したように、発表は平均1回に7名、つまり1列分で、グラフからもわかるように、生徒にはやりやすいペースだったといえる(86.9%が「ちょうどよい」と回答)。筆者も毎回のフィードバック数から考えると、このペースが、一番無理がないように感じられた。

### 6 発表の前のフィードバックは役立ったか？



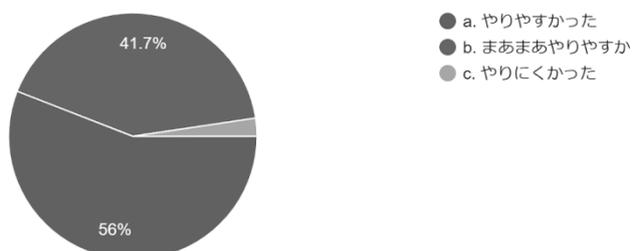
「役に立った」「かなり役に立った」の合計で70.3%であるから、フィードバックをした価値はあったと思われる。具体的な効用は以下のとおり：

- ・文法などのあやふやなところを改善できる。(20名)
- ・発表前に、客観的な指摘があると安心する。(19名)
- ・ほめられるとモチベーションが上がる。(4名)

文法の誤りなどは、細かい点までは指摘していな

いが、やはり、いきなり他人に自分のものを見せるのは不安感があるもので、その解消には一役買ったかもしれない。

## 7 発表方法について、やりやすかったか？

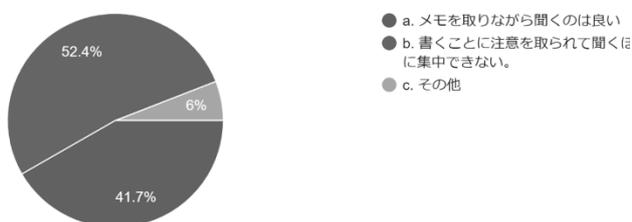


私が PC を用意し、生徒が教卓にきて Google Classroom からデータを提示する方式であったが、半分以上の生徒が「やりやすかった」と回答している。「まあまあやりやすかった」も加えれば 97.7% で問題はないように見えるが、以下のような回答もあった：

- ・自分のクロムブックでやった方が早かった。
- ・ポインターのようなものでわざわざパソコンに戻らなくてもスライドを進められるようにしてほしい。

GIGA スクールの一環で、生徒は 2 学期の途中からは各自のクロムブックを貸与されているので、それぞれが自分のクロムブックから行うほうがよかったのかもしれない。一方で、いちいち接続するのは時間がかかる面もあるので、一概にどちらが良いとは言えないと思う。

## 8 評価シートに記載することについて



漫然と聞かせてはまずいと思い、毎回「評価シート」（一種のコメントシート）を配布し、メモを取りながら聞かせていたが、これについては「書くことに気を取られて聞く法に集中できない」という負の面を指摘する割合が高かった（52.4%）。積極的な意見は 41.4% であるから、この「評価シート方式」は最高の余地が

あるかもしれない。別案として以下のものがあった：

- ・各自の PC をもってきて、オンラインフォームに感想を記入する方法もありだと思います。

筆者は、まだこのオンライン方式にはまだ十分習熟していないが、各自クロムブックを持っているのだから、これを活用する道を探るのは一つの方法であろう。

## 9 全般的な感想

いくつか、印象に残った感想を挙げる。

- ・準備はある程度大変なものではあったが自分の好きなことを話すことができたので自己主張の場のようなものとして楽しかった。この発表のように様々な“自己主張”をさまざまなものを通してできるような発表はとても面白いし、続けていってほしいなと思います。
- ・まず原稿を作る時に、内容を考えてそれを分かりやすい順に並べて、かつそれを英訳しなくてはならないので、英語力はもちろん他にも色々な力がついたと思う。また、皆の前でプレゼンをするのもすごく良い経験になった。全体を通して、もちろん大変だった部分もあったが、楽しくやることができた。
- ・スライドを使うことで、(1 学期の発表よりも)さらに分かりやすく、さらに本というテーマも興味がわきやすかったので、楽しかったです。自分の発表では緊張して上手く話せなかったのもっと上手く発表できるようになりたいと思いました。今回の発表の本の中から、原作が英語のものを 1 冊選んで、その本について深く読みとく (black cat などのように) というのをやっても面白そうだなと思いました。

→以上のような積極的な感想が多く、筆者は大いに励まされた。一方で、以下のようなものもあった。

- ・お勧めする本の題名など、人によって出てくる順番が若干違っていたので、スライドにある程度のフォーマットがあったら、理解がしやすかったと思います(細かくなくていいので、何ページ目に作者、何ページ目に題名、何ページ目以降はフリースペースなど)。
  - ・出していない人がいて、順番がぐちゃぐちゃになってしまっていた。
- これは、筆者の運営方法が今一つの面があった点である。原則順番でやっていたが、なかなか原稿書きやスライド作りに、個人差が出てしまい、先に完成した人にやってもらうなど、調整が必要であった。

また、筆者はオンライン系、デジタル系が苦手なので、今回の実践でも、もっとオンラインを生かせる方法があったのではないかという反省もある。例えば以下のような指摘は傾聴に値する：

・発表後に、みんなのスライドを閲覧できるようなシステムが欲しいと思った。テンポよく次のスライドに行ってしまう長く見続けることができなかつたスライドもあったので、スライドの共有で権限を閲覧のみにして見られるようにしてほしい。

→この生徒の指摘のように、「閲覧機能」を利用すれば、他クラスの生徒の発表スライドも見ることができ、より刺激は広がるであろう。ただ、スライドと同時にスクリプトなども提示してしまう可能性があるので、筆者はまだ躊躇している。本当はうまい解決方法があるのかもしれないが、今後の課題である。

## 6 評価について

評価についても一言触れておく。筆者は生徒がプレゼンを体験すること自体が重要で、評価についてあまり厳密にする必要はないのではないかと考えている。だからと言って、評価はいい加減で良いといっているわけではない。基本的には、ALT のサディア先生に **Contents / Delivery** の2つの視点から評価いただいている。筆者も評価しているが、優れているものについてはほぼ問題はない。両方ともAとなり、評価に差は出ないからである。

問題は、生徒が緊張したり、あまり練習していなかったりで声が小さく、ほとんど聴き取れず、結果的にALT の評価がCとなった場合である。明らかな練習不足であれば、評価がCで正当である。しかし、スクリプトは十分準備しながら緊張などで声が小さくなってしまう場合もある。こういう場合、筆者はプロセスを重視する。つまり、フィードバックのやり取りなどを考慮するのである。フィードバックのやり取りを複数回行い、筆者のアドバイスをスクリプトに反映しながら修正しているようなケースでは、その努力を評価し、評価も上方修正する。

ある発音がネイティブ・スピーカーに通じるかどうかはやはりネイティブ・スピーカーでないとわからない。したがって、基本的にはALT の評価を重視する。しかし、その発表に至るプロセスを見ているのはノンネイティブである筆者であるので、最終的には総合的に考えて評価する、ということである。そして、いたづらに減点法にせず、曲がりなりにもスクリプトとス

ライドを用意し、人前で発表したことを積極的に評価してやる、ということである。もちろん、ふざけたり真剣味の足りない発表については、その場でも注意し、改善が見られない場合は厳しい評価をする。発表の音声小さくて聞こえない場合は“**louder, please**”と言って聞こえるような声を出すよう注意を喚起する。

学習の評価は、技能試験のようなその場での絶対評価とは少し異なり、いかに努力をしたかというプロセスの評価が必要であろう。

## 7 おわりに

本稿では、“**The Book I Recommend**”という“**Sow and Tell**”活動を、Google スライドを用いて行う試みとして、紹介してきた。筆者自身が、Google スライドに充分習熟していないので、出来る範囲で行った実践ということになるが、少なくとも筆者が従来行ってきた「お気に入りの本紹介」という活動よりも、時間もかかったが、生徒のこの活動への取り組み、達成感もこれまでになく高かったという印象がある。

中3は一通りの文法項目を学び、語彙的にもかなり広い分野のことについて表現しうるような段階に来ている。テキストの内容・分量も多いため、通常授業2時間、TT1時間の範囲では展開が難しいのでLL授業を含めた、週4時間の授業を1人で担当することが教科内でも容認されている(中1、中2のうちは原則として通常授業2時間+TT1時間を1人で担当し、LLはもう1人別の教師が担当することが多い)。つまり、中高6年間の英語教育で週4時間を1人の教師が担当できるのは中学3年が唯一と言っても良い。

文法的・語彙的にも表現力が豊かになったこの時期に4時間の授業を担当できるということは、様々な言語活動を実践し、展開することが出来るということである。その点で、「発展期」の始まりである中3というのは大変重要な時期である、といえる。高校生になって、海外との文化・研究交流をする準備期と捉えることも出来る。

年齢的に、筆者にはもう1度中3を担当する機会は、残念ながらない。しかし他の英語科スタッフは、まだまだその機会が残されている。拙い実践であるが、何らかの参考になればと思い、「個人研究」という形で少し詳しい形で報告した次第である。1人の教師が提供できる教材には限りがあるが、今回のような実践は生徒同士がお互いいわば「教材」を提供し学びあう場となる。是非お勧めしたい実践である。

別紙資料 1

The Book I recommend

# The World's Slaughterhouse Tour

Written by Junko Uchizawa.

3-A Takara Fushimi

①

The Book I recommend



MEAT!

Have you ever think about how to make meat?  
All over the world, meat was made in slaughter house.

Slaughter house → 屠畜場



②

The Book I recommend



Junko Uchizawa  
=Illustration report writer

Age: 53  
Person's Origin: Kanagawa  
Live: Shodoshima, Kagawa

Illustration report writer  
→ writer using illustration to show what they want to show

③

The Book I recommend

Her famous books



The 700 Day War with a Stalker



Drifting Along On An Island



The World's Slaughterhouse Tour

Drift: 漂? Stalker: ストーカー

④

The Book I recommend



She shows many things by writing accurate pictures.

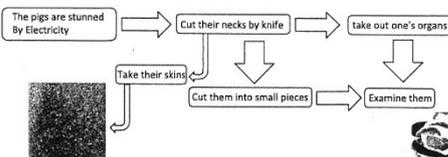
→ The book was easy for me to read

↑ This picture shows when the worker cut a pig neck.

Accurate: 精密な

⑤

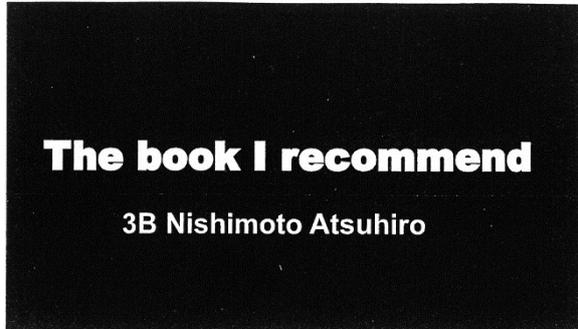
The Book I recommend



Stun: 気絶する Organs: 内臓 Examine: 検査する

⑥

①



②

the information about the book



*Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde*

written by Robert Louis Stevenson

written in 1885, published in 1886

genre: Psychological thriller, Gothic

③

about the author



Robert Louis Stevenson (1850-1894)

Born in Edinburgh, Scotland

He had been suffered from serious bronchial trouble for long time

He wrote various kinds of works

Died in Apia, Samoa

④

about the book



set in 19th century London

the theme :

**"double personality"**

Dr. Jekyll (a gentleman)

↓ use drugs

Mr. Hyde (a ugly man)

⑤

the character

- Gabriel John Utterson (the main character, a lawyer)
- Dr. Henry Jekyll (Utterson's old friend, large and well-made)
- Edward Hyde (very creepy, small he was seen to kill a man)
- Dr. Hastie Lanyon (a longtime friend of Jekyll and Utterson  
He is the first person to discover Hyde's true identity)

⑥

summary of the book

Utterson heard a strange story about Hyde

↓ searched for Hyde

He found the some relationship between Hyde and Jekyll

Lanyon was taught the truth by Jekyll and shocked to death

↓ try to meet Jekyll

Utterson found dead Hyde and Jekyll's letter



### 別紙資料3

The list of books the students recommend

	本のタイトル	作者	本のタイトル	作者	本のタイトル	作者
1	あらしのよるに	木村裕一	Dr.コトー診療所	山田貴敏	Undertale(RPG)	Toby Fox
2	蜜蜂と遠雷	恩田陸	宇宙のみなしご	森絵都	きみの友だち	重松清
3	のぼうの城	和田竜	ハリポッターシリーズ	J.K.ローリング	スマホ脳	アンデシュ・ハンセン
4	春夏秋冬代行者	暁佳奈				
5	りゅうおうのおしごと	白鳥士郎	ひと	小野寺史宜	流星の絆	東野圭吾
6	若きウェルテルの悩み	ゲーテ	義妹生活	三河ごーすと	Darkwing	Kenneth Oppel
7	午後の恐竜	星新一	ドリトル先生シリーズ	H.ロフティング		
8			高熱隧道	吉村昭	ハリポッターと賢者の石	J.K.ローリング
9	億男	川村元気	グスコブドリの伝記	宮沢賢治	未来イソップ	星新一
10	14歳の水平線	柳月美智子	屋上のテロリスト	知念実希人	転生したらスライムだった件	伏瀬・川上泰樹
11	図書館戦争	有川浩	首都感染	高嶋哲夫	蜜蜂と遠雷	恩田陸
12	空の境界	奈須きのこ	呪術廻戦	芥見下々	深夜特急	沢木耕太郎
13	死神の精度	伊坂幸太郎	未来からのホットライン	J.P. ホーガン	夜明けの街で	東野圭吾
14			ONE PIECE	尾田栄一郎	きよしこ	重松清
15	Into the Magic Shop	J. Dory	怪人二十面相	江戸川乱歩	風が強く吹いている	三浦しおん
16	GAF四騎士が創り変えた世界	S. Galloway	消える総生島	はやみねかおる	リアル鬼ごっこ	山田悠介
17	頭で投げる。	石川雅規	二月の勝者	高瀬志帆	宝島	R.L.スティーンソン
18	キノの旅	時雨沢恵一	隈研吾建築図鑑	宮沢洋	夜警 (満願)	米澤穂信
19	ハリポッターと賢者の石	J.K.ローリング	水滸伝	北方謙三	蜜蜂と遠雷	恩田陸
20	フランダースの犬	ウィーダ	B.L.A.G (無差別殺人株式会社)	両角長彦	LIFE<人間が知らない生き方>	篠原かをり・麻生涼昌
21	夢水清志郎事件ノート	はやみねかおる	天久鷹央の推理カルテ	知念実希人	そして誰もいなくなった	A. クリステイ
22			十字軍物語	塩野七生	Factfulness	Hans Rosling et al
23	獣の奏者	上橋菜穂子	告白	湊かなえ	博士の愛した数式	小川洋子
24	聖の青春	大崎善生	重要な任務	星新一	そして誰もいなくなった	A. クリステイ
25	塩の世界史	M. Kurlansky	姑獲鳥 (うぶめ) の夏	京極夏彦	樽原村紀聞 - その風土と人間	瓜生卓造
26	探偵はもう、死んでいる	二語十	ラッシュライフ	伊坂幸太郎	天久鷹央の推理カルテ	知念実希人
27	超時間術	Daigo	君たちはどう生きるか	吉野源三郎・羽賀翔一	ちからたろう	今江祥智
28	十津川警部シリーズ	西村京太郎	樹物語	西尾維新	タナトスの誘惑 (夜に駆ける)	星野舞夜
29	ワールドトリガー	葦原大介	発火点 (親友のたのみ)	星新一	羊と鐘の森	宮下奈都
30	真夏の方程式	東野圭吾	The Lost Hero	Rick Riordan	盤上のアルファ	塩田武士
31	探偵ガリレオ	東野圭吾	屍人 (しじん) 荘の殺人	今村昌弘	かがみの孤城	辻村深月
32	聖の青春	大崎善生	ジキルとハイド	R.L. スティーンソン	大地の子	山崎豊子
33	世界屠畜紀行	内沢旬子	アルゴリズムとデータ構造	大槻兼資	サンタクロースを殺した。そしてキスをした。	犬君雀
34	海底2万マイル	J. ヴェルヌ	月世界旅行 (地球から月へ)	J. ヴェルヌ	How would you move Mt Fuji	William Poundstone
35	ブラックペアン1988	海堂尊	H2	あだち充	ソードアート・オンライン	川原礫
36	伝説のエンドーくん	まはら三桃	進撃の巨人	諫山創	怪盗クイーンシリーズ	はやみねかおる
37	ぐらんぶる	井上堅二	モモ(MOMO)	ミヒャエル・エンデ	Matilda	Roald Dahl
38	フィッシュストーリー	伊坂幸太郎	3-Minute Stephen Hawking	Paul Parsons	これは経費では落ちません	青木祐子
39	ノースライト	横山秀夫	君たちはどう生きるか	吉野源三郎・羽賀翔一	徒然草	松尾芭蕉
40	そして誰もいなくなった	A. クリステイ	アルジャーノンに花束を	ダニエル・キース	天空の城ラピュタ	宮崎駿
41	インシテミル	米澤穂信	Forrest Gump	Winston Groom		